エッセイ

ー 私の文学館散歩（十三） ー

甲信越・やまなみ街道にメルヘンを探す

ー または、いくつかの再会を巡る散歩ー

松村　茂治

ある友のこと

「どこの高速道路を走るのが好きか」と聞かれたら、間髪を入れず「中央高速」と答えるだろう。そこが、我が家から一番近い（最近、圏央道ができたので、二番目か？）高速道路だからというだけではない。その沿線には、昔から馴染んで来た風景があるからだ。長いこと、大月の先の大学で非常勤講師をしていたことも一因かもしれない。そこに勤務していなかったら、この同人誌に名を連ねることはなかった・・・おっと、これは別の話だ。馴染みの風景はもう少し先にある。

それがはじめに現れて来るのは、笹子トンネルを抜け、勝沼のインターチェンジを過ぎた辺りからである。見通しの良い、直線状の道路の先に、南アルプスの白根三山（北岳、間ノ岳、農鳥岳）とその少し右手前に鳳凰三山（地蔵岳、観音岳、薬師岳）が見えてくる。時期としては四ー五月頃がいい。白根三山にはまだ雪が残って白く輝き、その前衛となる鳳凰三山が、どっしりとしたシルエットのような山並みを見せてくれる。空気が澄んでいれば、地蔵岳の山頂にある、通称オベリスクと呼ばれる岩山が、車からもはっきりと見ることができる。

今となっては信じられないことだが、これら両三山の頂きから、この甲府盆地を見下ろしたことがあったのだ。いずれも雪の時期だった。ただし、その日好天に恵まれ、いくら性能の良い望遠鏡を使ったとしても、山頂からこの中央高速を見ることは出来なかった。なぜなら、当時、この高速道路は、まだ開通していなかったから・・・

中央高速は、やがて両三山を左手に見ながら、甲府市街を迂回するようにして北に向きを変え、甲府盆地を過ぎると、今度はやや西向きに進路を変えて進むことになる。そして、韮崎を過ぎたあたりから、正面に八ヶ岳連峰が見えてくる。視認での高低の判断は難しいが、正面少し右手に急峻な岩峰のようにそそり立っているのが連峰の最高峰・赤岳である。

その八ヶ岳を舞台にした新田次郎の小説に「縦走路」があるが、ここではそれは取り上げない。新田次郎の作品には、作者が気象学者ということもあって、さすが！と思わせる自然描写が多々あるが、そこに恋愛がからんでくると、とたんにつまらなくなる、というのが私の印象である。ああ、新田次郎の八ヶ岳ではない。私の八ヶ岳である。

私が山登りを始めたのは案外早く、中学校一年のときである。本格的なアルピニストだったクラス担任が、ボッカ訓練（来るべき本格的な山登りに備えて、あえて重い荷物を背負って山歩きの訓練をすること）のために裏高尾を歩くというのを聞きつけ、数人の仲間とついて行ったのである。それをかわきりに、中学から高校にかけて、奥多摩の山々をほぼ歩き尽くすと、大菩薩峠、扇山、瑞牆山、金峰山と中央線沿線の山々に足を伸ばし、より高いところを目指すようになっていったのだった。

そして、高校三年の夏休み、いささか受験勉強に疲れたこともあって、中学時代から一緒に登ってきた友人二人と相談をして、南八ヶ岳の縦走を決めたのだった。

当時、私たちは東京都府中市に住んでいたので、八ヶ岳に行くとなれば、中央線を利用したはずだが、上野から信越線に乗り込み、小諸から小海線に乗ったような記憶もある。小海線への乗り継ぎ時間の関係で、こちらの路線を選んだということもあり得るが、はっきりしない。

いずれにしろ、最後は海尻駅か松原湖駅からバスで稲子温泉に向かった。記憶がはっきりしているのは、その日の宿泊が黒百合ヒュッテだったということ。なぜはっきりしているかというと、夜間に体調不良に陥り、ほとんど一睡も出来ずに一夜を過ごしたからである。食べたものを全て吐き、水も受けつけないような状態が、翌日一日続いた。一緒に宿泊した人たちに似たような症状を示す人はいな

かったから、私の個人的な事情によるもの、おそらく、受験勉強で体力がかなり消耗していたのだろうと思っていた。

後になって考えれば、そこからさっさと下山すれば良かったのだが、戻ることになれば、同行の仲間も一緒に山を下りることになるだろうから、そういうことはしたくなかった。それに帰るとなれば、どのみち自力で歩かなければならない訳で、すでに稜線に出ているのだから、この先はたいした上り下りはないだろうと考え、吐き気を抱えつつ、縦走を続けることにしたのだった。

硫黄岳、横岳を過ぎ、最後の赤岳を目の前にして、この急峻な登りは無理と判断し、私だけ巻き道を使って高低差のない道を進み、頂上から降りてくる仲間を待ったのだった。このときにはまだ、水を一口飲んでも吐き出すような状態だったのだが、降りてきた仲間と落ち合い、下山を始めると間もなく、それまでの吐き気が嘘のように治まり、そのとき初めて、高山病にかかっていたのだと悟ったのだった。

ずいぶんと長い前置きになってしまった。このとき一緒に八ヶ岳を歩いた友人の一人が、四ー五年ほどの闘病の末、この春、他界した。

彼とは裏高尾以来いくつもの山登りをしてきたが、彼は山男というより、子どもの頃からの車男（カーマニア）で、車に関しては玄人裸足の知識と技術を持っていて、その方面から誘われたこともあったが、車は趣味という姿勢を崩さなかった。車の構造とその機能を熟知していたので、私には真似できないような運転技術を持っていた。学生時代、（昭和四十年代初頭）発売されて間もないホンダのスポーツカー（ホンダＳ－800・通称「エスハチ」）を愛車にしていて、しばしば乗せてもらった。

彼の闘病中、八ヶ岳縦走を試みたもう一人の友人と見舞いに行くことがあった。そのとき、昔、愛車に私を乗せて、曲がりくねった奥多摩の山道だったか、まだ出来て間もない対面通行の中央高速だったかを走ったとき、車に弱い私が車酔いを起こしたことを思い出し、今や、その私が車で見舞いに来るのだから、成長したものだと笑われたことが忘れられない。

闘病中の彼に、体調が芳しくなくて運転が厳しいなら、これまでのお返しに私が運転して、奥多摩でも富士五湖でも連れて行ってやるからと誘ったのだが、彼にしてみたら、病身とはいえ、運転手が車酔いするような車に乗るという危険を犯すことはしたくなかったのだろう、当然のことながら、最後まで、私のこの申し出に応じることはなかった。

愛車のエスハチは、何十年も、彼の家の庭先にシートを被せられて置かれていたが、ご子息の手により昔の雄姿を

取り戻し、懐かしいエンジン音を轟かせるようになった。そのエンジンの始動と引き替えるかのように、彼の心肺が止まることになったというのは、何とも皮肉なことであるが、車男（カーマニア）の彼にとっては、意味のある輪廻転生ということなのかもしれない。合掌。

八ヶ岳ドライブマップ

八ヶ岳の周囲には、私のような、ときに自分の運転する車でも酔うような、頼りない運転手でも、走ってみたくなる道路がいくつかある。

その筆頭は〈ビーナスライン〉だろう。茅野市内を出た辺りでは、何の変哲もない田舎道で、特に見晴らしが良いわけではないが、白樺湖を過ぎて急峻な登りが始まると事態は一変する。車山から霧ヶ峰、八島ヶ原湿原を越して美ヶ原まで、テレビの旅番組でしばしば紹介されるのも無理からぬことと思う。

〈ビーナスライン〉から途中で別れて、八ヶ岳の南麓を原村を経て富士見高原方面に行く〈エコーライン〉もある。確か、蔵王の方にも同じ名前のルートがあったと思うが、どちらが元祖だったのだろう。こちらの〈エコーライン〉の起点がどこで、終点がどこか、私はよく分からない。見通しの良い直線的な道路で運転はしやすが、高原のドライブウェイというより、〈八ヶ岳西麓広域農道〉という正式名が示すとおり、高原の野菜畑の中を走っているようなのどかな道路で、沿道には、そばや野菜など、この地の農産物を扱う店が多い。

ある時、信州の観光ガイドブックを開いていて、東山魁夷の名前に目が止まった。〈エコーライン〉から別れて奥蓼科温泉郷に向かう、通称〈湯みち街道〉沿いにある御射鹿池（みしゃかいけ）と呼ばれる小さな池は、魁夷の傑作「緑輝く」のモチーフとなった池だというのである。早速行ってみると、水面とその向こうに見える森林の佇まいは、確かに、美術館で見た風景と同じである。

近くは、東京恵比寿の山種美術館で、旅先では、善光寺裏手の東山魁夷館、遠くは京都・嵐山の福田美術館で、魁夷の絵には接してきた。緑一色で描かれたような一連の作品を見て、こんな絵が一枚欲しいと思ったものだが、〈エコーライン〉の正式名称が〈広域農道〉というのと同じように、ときに白馬が姿を現す幻想的な湖が、〈農業用の溜め池〉であると種明かしされると、急に、神秘さのヴェールを剥がされたような気持ちになる。そして改めて、画家はその風景を忠実に写し取るのではなく、そこにインスピレーションを得て、自らの内面を描き出すものなのだということを実感するのである。

〈湯みち街道〉のすぐ北側を、国道299号が通っている。この国道は、茅野から群馬県の上野村を通り、秩父を経て、入間辺りまで達しているようだ。この国道のうち、茅野から八ヶ岳連峰のほぼ中央部を横切り小海線の八千穂駅近くまでには、〈メルヘン街道〉の名がつけられている。

この国道がいつ開通したのか、誰が、何を根拠に〈メルヘン街道〉と名づけたのか、私は知らない。この道路が八ヶ岳を越える麦草峠の標高は二〇〇〇㍍を超えており、近くにある白駒池は、私が山登りをしていた半世紀前には、秘境の湖と呼ばれていた。今では車であっという間に通り越してしまう峠だが、学生時代、何度かこの峠と湖を訪ねてみたいと思いながら、あまりのアクセスの悪さに断念した覚えがある。〈メルヘン街道〉と聞いて、私は真っ先にこの白駒池を思い浮かべたのだが、それは、当時使っていた「山岳ガイドブック」に、秘境の湖と紹介されていたからで、勝手にメルヘンの湖と思い込んでいたのではなかろうか。

同じ名前を持つ街道がドイツにあると聞くが、そこは「音楽隊」でお馴染みのブレーメンや、その「音楽隊」の作者グリム兄弟の生誕地とつながりがあるので、そう名づけられたとのことだ。しかしながら、299号線沿いにメルヘンと結びつくものがあるという話は聞いたことがない。本当に、この近くでメルヘンに出逢えるのだろうか？

最近、現地で手に入れた観光地図には、上記以外にも、愛称のついた道路がいくつか出ている。

蓼科の方から南下し、〈メルヘン街道〉と交差して原村方面に進んできた〈エコーライン〉は、村の外れで〈ズームライン〉と交差している。そして、そのズームラインは途中から八ヶ岳の山裾を巡る〈鉢巻道路〉と名前を変える。ズームラインは、見通しのよい走り易すそうな道だが、名前の由来については私は知らない。道路標識にはズームラインと併せて〈ふるさと農道〉とあり、この辺りが、長閑な所ということがよく分かる。

その先にある〈鉢巻道路〉は、〈八ヶ岳高原ライン〉とも呼ばれている。八ヶ岳の裾野の、かなり高い所を等高線と並行するように走っている。ここは何度か通ったことがあり、〈ビーナスライン〉に劣らない、快適な高原のドライブコースだったと覚えている。甲府盆地を見下ろせるような所にはビューポイントがあり、遠くに富士山を望むことが出来たと思う。

小海線を挟んで、〈八ヶ岳高原ライン〉と同じように、八ヶ岳南麓を巻くようにして走る〈レインボーライン〉を見つけた。「見つけた」と行っても新発見ということではなく、何度か車で通ったことがある道だが、そこにレインボーの名前がついていたとは知らなかった。確か、この近くには、〈金田一春彦通り〉があったはずだが、もう少し麓寄りだったかもしれない。沿線に、国語学者の名前のついた図書館があるのでこの名前がついたと聞いた。そのとき、ここに図書館ができた訳も聞いたような気もするが、忘れてしまった。

ああ、いつの間にか、山梨県まで来てしまった。今回の散歩は、メルヘンを巡る散歩だったはずだが、分かったことは、八ヶ岳を横断する〈メルヘン街道〉沿いには、その名に合致しそうな人物や作品、施設などはありそうもないということである。

メルヘンに出会えるか？

地図を拡げ、八ヶ岳山麓でメルヘンを感じられそうな所を探していて、〈えほんミュージアム清里〉に目が留まった。中央高速を須玉インターで降り、清里方面に向かって山道を登って行く途中にあるようだ。ということは、国道299号からはかなり離れているので、〈メルヘン街道〉とは直接関係はないように思われる。

ここに、エロール・ル・カインの原画が収納・展示されていると知って、訪ねてみようと思ったのだった。この画家については、名前は覚えていなかったのだが、彼の作品を案内する「えほんミュージアム」のHPを見て、以前、この画家の原画展を見に行ったことを思い出したからだ。

十年ほど前、戸塚にある職場からの帰り、特に欲しいものがあったわけではないが、乗換駅の横浜で途中下車してデパートに寄ったときのことである。エスカレーターの脇に張られた催し物のポスターに目を奪われたのだった。それは、館内の美術館で開催されている絵本原画展についての案内で、モノクロの、一見、ビアズレーを思い起こさせるようなタッチの絵に惹かれ、覗いてみることにしたのである。それが、この作家との初めての出会いだった。

その日展示されていたのが、彼の作品だけだったのか、他の画家の作品もあったのか、はっきりしない。それどころか、ル・カインの作品に関しても、ポスターに使用されていた作品以外にどんな作品があったのか覚えていない。

この原画展が、あまり印象に残っていないのは、何の予備知識もなく飛び込んだからであろう。その上、ポスターにあったモノクロの挿絵の印象が強烈で、それだけが記憶に残り（今回、清里に行って、この作品が、「キューピッドとプシケー」の挿絵だったことを改めて知った）、彼の真骨頂とも言うべき色彩豊かな精密画風の作品は、言ってみれば、私の記憶の中で互いに相殺し合ってしまい、漠たる印象としてしか残らなかったのである。

図-1　キューピッドとプシケー

図ー1は、横浜のデパートで開催されていた原画展のポスターに採用され、ル・カインの作品として唯一私の記憶に残っていたものである。調べてみると、「キューピットとプシケー」と題された絵本が出版されてはいるが、現在は絶版になっていて、ここに掲載したのは、「えほんミュージアム清里」で購入した額入りのイラストレーションのコピーである（Cupid and Psyche © 1977 Errol Le Cain）。

この原画展に限らず、美術展に行って悩むのは、展示されている作品が多いと、一つ一つの作品の印象が薄くなってしまうということである。生来の貧乏症で、入館した以上、出来るだけたくさん見ないと元が取れないとばかり、欲張るのがいけないのは分かっているのだが、なかなかそこから脱却できないでいる。

エロール・ル・カインについて、簡単にまとめておこう。一九四一年生、一九八九年病没（四十七歳）。シンガポール生まれのイギリス人。戦火を逃れ、一時インドで生活し、一五歳以降はイギリスを生活・制作の場とする。七十年代半ばに仏教に帰依したということだが、作品にアジアの雰囲気が濃厚なものがあることと無関係ではあるまい。

作風について、吉田新一は以下のような紹介をしている。

・・・彼の絵は、流動的で、劇的で、色彩は絢爛豪華であった。特に、細密画風、様式画風の絵であるため、中世のビザンチン絵画や彩色写本、近代ヨーロッパのルネッサンス、バロック、ロココ、ロマン派など各時期の絵画様式、さらにはエジプト、アフリカ、ペルシャ、インド、中国、日本、ロシアなどエスニック美術などから学び取る点が多かったようだ。（中略）彼がもっとも親愛感をもっていたのはウオルター・クレインにはじまるアールヌーボー様式と・・・（中略）従って、十九世紀後半から二十世紀初頭におけるヨーロッパデザインをフ

ィルターにして、ル・カインは西洋と東洋の過去の絵画様式を巧みに融合して応用したのであった。（「イメージの魔術師　エロール・ル・カイン」）

細密画風、様式画風、それにウオルター・クレイン・・・となると、もう少し、この作家について知ってみたいと思う。

吉田はまた、「いばら姫（眠れる森の美女）」や「おどる十二人のおひめさま」を例に、ル・カインの作品には、ユーモアのセンスや遊び心が溢れていると指摘している。個人的には、この二作は、大人の鑑賞に堪えるというか、少なくとも私は、このようなタッチの作品が好みである。

図ー2は、「いばら姫」のなかの一場面で、これだけのスペースに、十分過ぎる奥行きや高さを感じられる構図になっていることに驚かされるが、姫の足下にいる一匹のネズミが愛嬌であるとともに、物語の行く先を暗示するかのようである。

ひょっとしたら、我が家の、お爺さん用（つまり私用）の絵本のなかに、彼の作品があるかも知れないと思って探してみると、一冊あった。三十年以上も前に購入した、数十冊のセットの中の一冊、「クリスマスのくつした」である。「キューピットとプシケ」とも「いばら姫」ともタッ

図-2　いばら姫

チの異なる作品で、言ってみれば、全く目立つ装幀の本ではないため、見逃していたようだ。開いてみると、確かに遊び心が感じられる作品で、この本ではそれは仕掛け絵本になっているところに現れている。

ある家にプレゼントを届けに来たサンタクロースが、煙突が見当たらなくて困っていて、読者の子どもに助けてもらわなければならないという設定である。読者は絵本のドアや窓に作られている切れ込みを開けて、サンタを室内に案内するという、ポップアップ絵本の一種である。

さっそく、三歳半になる孫でテストをしてみると、サンタが贈り物を持って来たことは分かるのだが、彼が煙突から入るということがわからない。確かに、私だって、子どもの頃見て来た煙突は、銭湯の煙突を除いて、直径十数センチメートルほどだから、そこからサンタが入って来るとは考えられなかった。きっと、もう少し大きくなって、サンタは架空の存在であると分かってから、煙突からの訪問を理解したのではなかろうか。私としては、この孫には、窓やドアに作られた切れ込みに気づくよう、誘導尋問的に臨んだのだが、期待したような感動は得られなかった。

そこで、次に小学校一年生のもう一人の孫に聞いてみた。サンタがどこから入って来るかという問いには、窓から？ドアから？という答えで、煙突という発想はなかった。確かに、煙突のある住居を目にすることはなくなってきた。それに、一年生ともなると、自分の所に届くプレゼントは、もはやサンタが持って来てくれるとは考えてはいないのではなかろうか。

サンタは煙突から入って来ると考えられていると伝えると、火を燃やしていたら入れないと、至極もっともな答えが返ってきた。ともかく、件の絵本を開いて、サンタを案内するように言うと、意図はすぐに理解したようで、自ら本の切れ込みを開いて、次々と部屋を通過して、目的とする、靴下の下がった部屋にたどり着いたが、そこでもう一度困ったことが起きた。彼には、靴下にプレゼントを入れるという発想は全く見られなかったのである。

今や、我が国の子どもたちは、年に一度のサンタクロースの訪問には、それほど心ときめかないのかもしれない。少なくとも、彼らが熱中するのはニンテンドーやタブレットだから、仕掛け絵本程度ではインパクトが足りないことは一目瞭然だった。

散歩の出る前に考えたこと

〈えほんミュージアム清里〉でエロール・ル・カインに再会（？）できたのは幸運だったが、ここは〈メルヘン街道〉とは直接的な関係はなさそうだった。開館が一九九七

年（平成九年）ということは、すでに三十年近い歴史を持つことになる。しばしばこの近くまで行きながら、このミュージアムに足が向かなかったのは、こちらの探求心が足りなかったからということになるのだろうが、あえて言い訳を探せば、甲信方面でメルヘンと言いうと、どうしても黒姫や安曇野を連想してしまうのである。

信州の地図を開くと、安曇野には〈ちひろ美術館〉、黒姫には〈童話館〉があることはすぐに分かる。これらが私と信州のメルヘンを結びつけていることは間違いはないが、それには一冊の童話との出会いが強く影響している。

「木かげの家の小人たち」（いぬいとみこ・福音館）を初めて手にしたのは、この本の裏表紙の見返しに、一九七四年六月とのメモがあるから、今からちょうど五十年前、大学院生のときで、その翌年に大学への就職が決まったのだった。何がきっかけでこの本を読んだのか覚えていないが、その頃、内外のファンタジー作品を立て続けに読んでいて、トールキンやフィリッパ・ピアスを知ったのもこの頃だった。

「木かげの家の小人たち」は、その名が示すように、身長十五センチほどの小人が登場するファンタジーと思っていたが、本稿の執筆を機に読み直してみて、小人が出てくるからファンタジーと、短絡的に結びつけてはいけないように思えてきた。

物語は、大正二年、東京郊外（小説では〈東京の郊外〉となっているが、後に、空襲で焼けたとあるので、今で言えば都内だろう）にある森山家に、イギリス人から、二人の小人が託されたところから始まる。

最初に小人たちの世話を託されたのは、長男の達夫（国民学校三年生）、次いで、妹のゆかりが引き継ぐが、この子はほどなく病死し、その後を、遠縁の透子が引き継ぎ、二十年ほどが過ぎる。達夫と透子が結婚し、二人の間に生まれてきたゆりをはじめとする三人の子どもたちが代わる代わる小人の世話を引き継ぐことになる。

時は第二次大戦末期、東京にも戦禍が迫り、国民学校三年生になったゆりは、小人たちを連れて信州・野尻湖近くの知り合いの所に疎開することになる。物語の三分の二以上は、そこでの生活が描かれている。

野尻湖畔で、戦争に脅かされる現実とは無縁の、ゆりと小人たちとの夢の暮らしが描かれるというなら、それはファンタジーということになるのかもしれないが、この作品は、全編にわたって、現実の世界で起きている戦争を色濃く反映した生活を描いている。

そもそも、イギリス人から小人の世話を託されたという

こと自体、戦争とは無縁ではない。このイギリス人は、反戦的な文章を書いたことを当局に知られ、日本に住めなくなったという設定である。

ゆりの家族についてみれば、父親の達夫は、反戦思想の持ち主ということで投獄されており、上の兄は学徒動員され戦死してしまう。またすぐ上の兄はすっかり愛国少年と化し、敵国であるイギリス生まれの小人の世話をするのは非国民であるという考えを持つようになる。もちろん、疎開しているゆりの身の上にも、小人たちの重要な食料であるミルクが手に入り難くなったり、父親が投獄されていることが周囲に知られ、冷ややかな目で見られたりするなど、戦争の影が重くのしかかってくる。

このように、この作品では、小人も彼らを守る森山家の人たちも、現実世界の戦争に巻き込まれ、それを生き抜くことがテーマとなっている。つまり、多くのファンタジー作品のように、主人公たちが、遠い所に冒険に出かけ、身に降りかかる困難に、仲間と力を合わせて対決し、それを解決して戻って来るといった体裁にはなっていないのである。

この作品の刊行は、一九五九年（昭和三四年）、まだ我が国の至る所に、戦争の爪痕が深く残っていた時代のことである。作者は、再び戦争を起こしてはならぬという思いを、小人や森山家の人たちの生活を借りて、子どもたち伝えようとしたのだろうと理解する。そういう意味で、「木かげの家の小人たち」は、ファンタジーというより、極めてリアリスティックな反戦小説なのである。

それに対して、その続編とも言うべき「くらやみの谷の小人たち」は、小人をはじめ、さざざまな空想上の登場人物が活躍する、本格的なファンタジーと言える。

この作品では、戦争が終わり、東京に戻るゆりと別れて野尻湖畔に残ることになった小人たちと、この地に育ってきた和製小人の〈アマネジャキ〉が、忍び寄る悪と戦うことが物語の根幹をなしている。

時代は、終戦から二十数年が過ぎ、森山家の子どもたちは、ゆりからその子どもたちへと世代交代している。

ところで、私は、「木かげの家の小人たち」を読んだあと、すぐにこの続編を購入してはいるのだが、最後まで読み通してはいないように思えてきた。

「くらやみの谷の小人たち」も、今回の執筆を機に読み直してみたが（いや、初めて全編に目を通してみたが、と言うべきかもしれない）、ほとんど記憶に残っていなかったのである。今回、途中で何度も放り出したくなったということは、前回は最後まで読み通すことが出来なかったに

違いない。今回、最後まで読み通せたのは、大げさな言い方をすれば、本稿執筆のための資料収集と考えたからである。

それには、私の読解能力も大いに関係していると思うが、それに加えて、皮肉なことだが、作者がこの作品を、前作のような現実世界を反映した作品ではなく、限りなく空想世界を舞台にした作品にしようとしたからではないかと思えてくる。

舞台は、現実の野尻湖周辺であり、妙高山や飯綱山、黒姫山など私が訪れたことのある実在の山名が出てくる。表紙や挿絵にも、北信と思われる情景が描かれていて、この辺に親しんできた者としては、それらが小説の中でどのように描かれるのか、楽しみにしたのだが、その期待は見事に外れた。

前述のように、作者はファンタジーを描こうとしたのであり、借りたのは名前だけで、極力、現実の世界を離れて、空想の世界の話にしたかったことは理解できる。しかしながら、そこにこの作品の難しさがあるように思えてならない。

はじめに気づいたのは、ファンタジー故の難しさと言ったらいいのか、ＳＦ小説にも時に見受けられる、舞台装置等についての説明の難しさ、煩雑さである。

作者は、現実には存在しない状況を設定して登場人物に活躍させようとするので、活躍の場を読者に理解してもらうためには、現実に実在する状況や道具を引き合いにしながら、説明をすることになる。ファンタジー色が濃くなればなるほど、その舞台装置や登場人物の視聴覚的な特徴については、くどいくらいの描写になりがちである。もちろんそれは読者を物語世界に誘い込むための方策で、読者サービスには違いないのだが、読者としては、舞台装置の説明はそこそこにして、はやく物語を先に進めて欲しいと思うのである。

その一例は、この作品の主要なモチーフである〈空色のコップ〉の描写にもある。

このコップは、元々は森山家の人たちが、小人たちにミルクを与えるための道具として登場したものである。このときのコップは、小人の背丈の半分ほどの大きさで、ミルク飲み以外の機能はない普通のコップなので、とりたてて煩わしい説明をする必要はない。

ところが、「くらやみの谷」にやってきたコップは、単なるミルク入れから、別の機能を持つようになる。ファンタジーにするためには、様々な仕掛けが必要なことは分からなくはないが、ミルクを飲むためのコップの中に、登場人物たちが入り込み、何年も過ごすようになったと言われ

ても、容易には受け入れ難いのである。コップは、敵からの一種の隠れ蓑のような存在になり、それはまた、くらやみの谷との連絡窓口ともなる。さらに、コップの中には〈見えない力〉が働いていて、そこから〈外へ出たい〉と思えば思うほど、その思いに逆らう力が強くなって、コップの下の方に引っ張られてゆく・・・。そして、そうした力がいつの間にか消え失せてしまうと、今度は「半分すきとおった六角形のかたちが、ただようように空中に生まれはじめ（中略）その六角形の『家』の中に、イカの白子みたいな透明なものが、ふわふわ、わきでて（中略）気がついてみると、コップの外のブーンブーンという音がいつかやんでいて、ピパ・・・ピパ・・・ピパ・・・というちがった音が・・・」と言った具合で、昔読んだときには、おそらくこの辺（全体の五分の一ほど）まで読んで、放り出したのではなかろうか。

物語の半分ほどまでは、そうした舞台装置の説明に費やされ、物語はなかなか先に進んでいないように思える。舞台装置の中には、いわゆる大道具・小道具だけではなく、登場人物も含まれることになる。

この物語には、たくさんの森の生き物たちが登場する。これもファンタジーを豊かにするための仕掛けであり、読者サービスの一環とも思われるが、私にはいささかにぎやかすぎるように思えてならなかった。それは、単に数が多いということだけではなく、説明し切れていないというか、作者自身持てあまし気味だったのではないかと思えるからである。

大昔に、野尻湖の覇権を争った斑尾山の大ガマとその好敵手である妙高山の地震（ない）の滝の大ガニが、この物語の本題である「いのちの川」と「死の川」という、二つの流れを巡って争うというのは分かりやすい。

しかし、大ガマの背後にいて、悪の枢軸となる山父や大杉の精がどのような存在なのか、今一つはっきりしない。山父については挿絵があるのでその姿については了解するが、その働きについてよく分からない。杉の精については、これが悪の中心に位置するらしいということは分かるが、その姿については、わからない。〈精〉なので実体はないということなのかもしれない。また、その先兵となって、堤防を決壊させようとするザリガニたちは、まさに一兵卒で、これは作者の嫌う軍隊組織と同じ構図ではないかと思えてしまう。

他方、防衛軍側にも、無理を承知と言わんばかりの所がある。

冒険や戦いに、助っ人が必要なことは分からなくはないが、モモンガーやヤマビコがどのような姿をしているのか、

どのような活動ができるのか、はっきりしない。さらに、防衛軍には、キノコ、ミズバショウ、リンドウ、スミレ、フキノトウなどの植物軍団も加わるが、彼らがどのような形態をしていて、どのような移動手段をもつのか、どのような働きができるのか、はっきりしない。

この「くらやみの谷・・・」の根幹をなすのは、邪悪な者たちによって壊滅されつつある「いのちの川」を奪還するための戦いであると言える。

このテーマに気づいたとき、作者は、前作で取り上げた、軍隊が戦う戦争から別の戦いに作品のテーマを移したのではないかと、私は考えた。「死の川」が、それまでそこに生きてきたさまざまな生き物の命を奪う存在として描かれ、そこに「いのちの水」を取り戻すというのなら、それは水質汚染の問題、より広く公害問題がテーマとなっているのかと思われたが、それは私の思い過ごしだったようだ。

作品の中で、戦後、進展してきた民主化の動きに暗い影を落とすような風潮のあることが指摘されており、作者の関心は環境問題ではなく、戦争問題にあったようだ。この作品が刊行されたのは一九七二年（昭和四十七年）だが、すでの昭和三十年代には水俣病や四日市喘息などの公害病が問題になっていた頃なので、やや残念な気がした。

ようやく散歩に・・・

ずいぶんと長い前置きになってしまった。ともかく、一度、黒姫・童話館に行ってみなければと思ったのである。いや、以前にも一度、行ったことがあるような気がするので、もう一度、というのが正しいのかもしれない。ただ、以前行ったとしても、そのときは自分の運転ではなかったと思うので、今回、建物の前に立っても、記憶ははっきりとはしなかった。

童話館は、野尻湖畔から車で山道を十分ほど登った所にある。この地に、どのような経緯でこの童話館が立てられたのか、また、ミヒャエル・エンデと松谷みよ子の作品が、主たる展示作品のようだが、なぜ彼らの作品がここに集められているのか、館内の説明書きには記されていたのかもしれないが、特に問題意識を持って見ていなかったので、覚えていない。エンデの再婚相手が日本人だったということを初めて知ったが、それがこの童話館の開館とどれほどの関係があったのか、また、松谷みよ子は、戦時中、野尻湖畔に疎開していた坪田譲治を訪ねたことが、彼女のデビューのきっかけになったとのことで、信州に取材した作品もあるようだが、それが彼女をここに結びつける主要な要因となったのか、また、館内のミュージアムショップを出

たところには、岩崎ちひろの山荘・アトリエが、野尻湖畔から移築されているが、それが童話館開館の主要因だったのか、分からないことだらけだった。

唯一わかったことは、ここには、いぬいとみこと小人たちにまつわることは何もなかったということである。

ただし、童話には直接関係ないが、ここに来て、思いがけない出会い、いや再会があった。

敷地内に移築されているちひろ山荘から戻って、ミュージアムショップで孫への土産物を探しているときだった。絵はがきを展示販売してるコーナーで、見覚えのある絵葉書きを見つけたのである。この近辺の野山や草花を描いた、淡い緑や青、紫を多用した、まさにメルヘンチックな絵で、少し離れた所にいた妻を呼ぶと、絵を見るなり、「あらっ、Hさんじゃない！」と、すぐに分かった。

絵はがきの元絵を描いた女流画家のHさんと知り合ったのは、四十年近く前のことである。Hさんは、当時の私の職場の近くに住んでいて、ある社会活動を通じて知り合ったのである。当時から、美術を専門に学んで来た方ということは知っていたが、実際にどんな絵を描くのかは知らなかった。知り合ってから数年して、Hさん家族は、ご主人の仕事の関係で長野の方に引っ越して行かれて、そこで交流は途絶えた。

Hさんたちが長野に移って数年後のことだった。

その頃、年末・年始あるいは春休みに、赤倉にスキーに出かけるのが、私たち家族の恒例行事となっていた。四輪駆動車いっぱいに、スキー道具とウエアを積み込み、わずかな隙間に人が小さくなって、雪道を行くのである。当時はまだ上信越自動車道が全線開通していなかったので、長野自動車道を明科の辺りで下りて、国道十八号を長野に向い、信濃町・野尻湖を経由して、妙高に向かったのだった。その後、高速道路が長野まで伸びたときには、ずいぶん便利になったと思ったものだった。その後さらに上信越自動車道が赤倉のスキー場のすぐ近くまで開通したが、その頃になると、私たちのスキー熱はかなり冷めてしまっていた。その熱が冷める前のことである。

赤倉のスキー場で夕方まで滑って、半分濡れた衣服を車に積み込み、途中で夕食を取って、家に着いたら、風呂に入って寝るだけという算段で帰途についたのである。

国道十八号線を信濃町辺りまでやってきて、目についたドライブインで車を停めた。正確な場所は特定できないが、信濃町から飯綱町にかけてのあたりだったと思う。食事を済ませ、支払いをしようとレジの前に立ったとき、カウンターの上に置かれていた絵葉書に目が留まった。何気なく手にとった絵葉書にH・・・の名前を見て、妻と顔を見合

わせたのだった。Hさんの絵を知る人から、ファンタジックな作品だと聞いたことがあり、なるほど、こんな絵を描いていたのだと思ったのだった。

ドライブインはそれほど混んではいなかったので、作者について聞いてみると、Hさんはすっかり地元に馴染んで活躍中とのことだった。あまりの偶然と懐かしさに、昔の知り合いだが、連絡はつくだろうかと尋ねると、すぐに電話を入れてくれたのだが、あいにく不在とのことだった。

その後、スキー場近くまで高速道路が伸び、国道十八号線を使う機会はなくなってしまった。皮肉なことにその後、次第にスキー場から足が遠のいったのだった。

黒姫童話館で目にしたのは、かつてドライブインで見たのと同じ絵葉書だった。ミュージアムショップの店員さんによると、Hさんは、最近までこちらに住んでいたが、関東地方に越して行かれたとのことで、今回もまたまたすれ違いになってしまった。こちらにいるときには、Hさんは、この童話館にもしばしば足を運んで仕事をされていたようで、絵葉書になっている作品のいくつかは、この黒姫童話館の周辺で描かれたものとのことだった。確かに、黒姫山に抱かれているような風景で、題材としては実在の風景を使っているが、描かれているのはまさに夢の世界である。

童話館へのドライブから帰って来て、改めて「木かげの家の小人たち」を開いていて、「もしや！」と思う挿絵を見つけた。

野尻に疎開することになったゆりは、兄の哲に付き添われて列車（今はなくなってしまった信越線）で柏原駅（現在の黒姫駅）に向かう。しかし、一つ手前の古間駅近くまで来たとき、少し前に貨物列車が脱線して、上下線とも不通になっていて、ゆりたちの乗った列車はそれ以上進めなくなってしまったのである。その先の古間駅まで行けば、トラックに乗せてもらえるかもしれないとの期待を抱いて、ゆりたちは歩き出す。

汽車をおりた人びとは、まるでひなん民のように荷を背負って線路の上を歩きはじめました。年よりの女の人は夕日をよけて手ぬぐいをかぶり、子どもたちは母親に手をひかれて、次の駅を目ざして歩きました。

大きな貨車が、むざんに列をみだしている脱線の現場を通って、トンネルのくらやみに入ったとき、ゆりは手をひいてくれている哲に知られないように、いそいでなみだをのみこみました。（123頁）

この頁の挿絵には、大人に手を引かれて暗いトンネルの

中をゆく少女の姿が描かれている。

現在の黒姫駅が、かつて柏原駅と呼ばれていたということが記憶に残っているのは、柏原が、小林一茶の故郷だったということを知ったからであろう。藤沢周平の「一茶」を読んだことがあったし、車で妙高方面に遊びに行くとき、何度かその旧家前を通ったことがあった。

いやいや、一茶でも周平でもない。問題はトンネルである。調べてみると、黒姫駅の一つ手前は、今でも古間駅のままである。古間駅は、長野方面から着た列車が山間から出て来た、少し開けた所にある。ということは、ゆりたちが止められたのは、その少し手前の山間部と言うことになる。

便利な世の中になったもので、グーグル・マップとストリート・ビューを開いて少し動かしてみると、〈北しなの線〉と並行して走る細い道路に、何とも雰囲気のあるトンネルがあることが分かった。

車一台がやっと通れるほどの狭いトンネルである。坑口のアーチ環や内部の壁面は切石で組まれているようだが、道路トンネルとしては、どことなく違和感がある。調べてみると、このトンネルは〈旧戸草トンネル〉と言い、一八八七年（明治二十年）に完成した長野県最古の鉄道トンネルだったが、一九八六年（昭和四十一年）、沿線の電化に伴い役割を終えて、鉄道には〈新戸草トンネル〉にその任務を譲り、現在は、町道のトンネルとして使われているとのことである。ということは、この旧トンネルは、ゆりが疎開した昭和一九年には、まだ信越線のトンネルとして使われていたわけで、「汽車をおりた人びとは（中略）線路の上を歩きはじめた」とあり、大人に手を引かれて出口を目ざして歩くゆりが描かれている挿絵は、まさにこのトンネルだったのだ。

おそらく、作者のいぬいとみこも、実際にこの路線を使い、このトンネルを歩いたことがあったのではなかろうか。この童話がファンタジーの形をとりながら、リアリティに富んでいることが、こうしたことからも分かる。

もう一つの散歩先は、「くらやみの谷の小人たち」に出てきた〈地震（ない）の滝〉である。

妙高山の近くに「地震（ない）の滝」と呼ばれる滝があったという覚えはないから、作者の創作と思っていた。私が知っているのは、妙高山へ登る途中の谷間に見た光明滝と称明滝、それに、昔子どもたちを連れて行ったことのある杉の原スキー場近くの苗名（なえな）滝くらいである。

苗名滝・・・ナエナタキ・・・ということは、もしや？と思って調べてみると案の定、関川にある苗名滝は、別名

「地震（ない）の滝」と呼ばれているとのことで、これも、私にとっては思わぬ再会となった。

子どもたちが小さかった頃、冬はスキーに、夏は山歩きにと、知り合いが妙高で宿を営んでいることもあって、よく出かけて行った。ある夏、天候に恵まれず宿に足止めされていたときに、女将から苗名滝に行ったらどうかと勧められたのだった。すぐ近くまで車で行けるからというのである。

「くらやみの谷・・・」を読んだとき、「地震の滝」は、その名前から地震に由来する滝と思っていたが、実際は、黒姫山の噴火によってせき止められた関川に天然のダム湖ができ、そこから溢れ出す水によって生まれた滝ということである。「地震」の名称は、豊かな水量が五十㍍を越える高さから落ちるときの轟き音が地震を連想させるところからそう名づけられ、いつしか「ないの」が「なえな」に変化したとのことである。

狐の嫁入り？鹿の婿入り？

ここ数年、私たちが定宿にしているホテルは、茅野から北八ヶ岳に向かうビーナスラインを蓼科湖の手前で左に入り、山道を少し入った所にある。おそらくは、手前にあるゴルフ場の開発に併せて作られたものだろう。道路に沿った植え込みや白樺の並木はいつもきちんと手入れされているが、途中に一箇所、何とも気になる所がある。

ビーナスラインから別れ、おおむね緩い登りだった取りつけ道路が緩やかな下り坂にさしかかったところで、突然、妙なるメロディーが聞こえて来るのである。それは、誰もが知っている「夏が来れば思い出す・・・」のメロディに違いないのだが、音感の良くない私の耳にも、いま一つしっくり来ないというか、自分のことを棚に上げて言うことになるが、まさに音痴のメロディーなのである。

後で知ったことだが、これは「メロディー・ウェイ」と言い、道路上に一定の規則で彫られた浅い溝と車のタイヤの摩擦によって生まれる音がメロディーを醸し出すように作られているらしいのだが、こちらの運転に安定が欠けるせいか、調子外れになってしまうのである。ここを通るたびに、「さあ、来るぞ、来るぞ、来たっ！」という感じになり、ときには、「今回は、かなり原曲に近かったんじゃないか?!」と、難しい課題をクリアしたような気分になることもあるが、たいていは音痴メロディー・ウェイである。

正しいメロディを奏でるには、設定されたスピードで運転する必要があるのだろう。対向車も信号もほとんど無いような道路なので、運転に緊張感を持たせるためには有意義な仕掛けということになるのかもしれないが、落ち着か

ないメロディはせいぜい十秒程度のことなので、この調子外れの不快感を避けるにためには、むしろスピードを上げて突っ走ってしまった方が手っ取り早いような気がする。ということは、本当に安全対策になっているのか、通る度に疑問に思うのである。

同じような仕掛けが、中央高速から岡谷ジャンクションで長野自動車道に入って間もなくの所にあったと記憶している。そこでは車の走行に伴って、ちゃっちゃっちゃっ、ちゃっちゃっちゃっ、ちゃっちゃっちゃっちゃっちゃっちゃっちゃっ、という三三七拍子が聞こえてきた。「夏の思い出」に較べたら、三三七拍子は仕掛けが単純なのだろう、調子外れの妙な緊張感を感じることはなかった。

話が横道に逸れてしまったが、宿舎の手前のメロディー・ウェイにさしかかる少し手前で、この春、思わぬおもてなしを受けたのだった。

間もなく、来るか、来るか・・・と思っていた所に、珍客が現れたのである（先方にしてみれば、私たちが闖客なのだが）。それは、山から降りてきて、車の前を横切っていった数頭の鹿の群れだった。間もなく日没を迎えようという時刻だったので、夕飯を物色するために山から下りてきたのだろう。後続の車がなかったので、群れが横切って行った所に車を停めてしばらく見ていると、群れの最後にいた子鹿が足を止め、物珍しそうにこちらを振り返っていたが、じきに仲間を追って、白樺林の中へ消えていった。

フロントでチェックインする際に、このことを告げると、「若葉の季節なので、エサを求めて、山から下りて来るようですね。車にぶつかったという話は聞いたことはありませんが気をつけてください。車との衝突より、ときどきイタズラをするので困るんです・・・」とのことだった。

翌日は朝から雨模様だったので、アウト・ドア散歩をイン・ドア散歩に切り替え、諏訪湖畔にある美術館を巡ることにしたのだった。

午前中、ハーモ美術館で、アンリ・ルソーやグランマ・モーゼスら素朴派の絵に触れ、ルソーもモーゼスも、メルヘンチックな絵だということを再認識したのだった。ここの展示品は、やや少なめだったが、これくらいがちょうど良いような気がした。

昼食後、湖に沿って東に進んだところにある北澤美術館で、ガレやドームのガラス工芸品に、久し振りに再会したのだった。ここに来たのは、おそらく三十年以上も前になるだろう。それと相前後して、清里の北澤美術館にも行ったことがある。残念ながら、清里の方は、かつての清里ブームが去ったからだろうか、十年ほど前に閉館になったと

聞いた。

そこを出る頃には雨になっていたので、散歩はそれまでとして、茅野のスーパーで夕食の買い物をして、帰途についたのである。

宿舎のあるリゾートに戻って来たのは、前日と同じような時刻だった。特に期待をしていた訳ではないが、というより、ほとんど忘れていたのだが、前日の所からそれほど遠くない所に、今度は一頭で現れたのである。仲間とはぐれてしまったのではないかと思ったが、彼は仲間を捜すような様子もなく、道路の中央を車の進行を妨げるように、いや、私の車を先導するかのように歩いて行くのである。クラクションを鳴らすのも大人げないと思い、しばらくそのまま後を追うことにした。

そっちに行けば仲間に会えるということだったのだろうか、鹿は、メインストリートを離れて、脇道に入って行った。ゴルフ場の開発をきっかけに作られたリゾートなので、コースの維持・管理のための作業車が出入りする道路のあることは知っていたが、今までそこに入ることはなかった。どこかでUターンしなければと思いながらしばらく進んで行くと、道が山陰に大きくカーブする辺りで、鹿は道から逸れて白樺林の中に走って行った。鹿が去って行った所に少し広くなったところがあったので、そこで方向転換が出来そうだった。まるで、「ここから戻りな！」と鹿に教えられたような感じだった。

車の切り返しをしているとき、白樺の枝越しに、西日が差し込んできていることに気づいた。私たちの上空には、まだ雲が立ちこめ、木の枝からは雨滴が舞っていたが、西の空には青空が覗き、雲間から数条の光が放たれていた。

その一条が、子鹿が走って行った方にスポットライトのように差し込んでいた。鹿の仲間がいるのかもしれないと思って、向きを変えた車から降りたとき、どこからか、残響のような、ざわめきとも歓声ともつかない声が聞こえてきた。それは、集団で下校する子どもたちの話し声のようにも思えたし、お祭りの山車を引く歓声のようにも思えた。少し離れた笹藪が、ずっと先の方まで動いて行くのが見えたので、前の日の鹿の群れがいるのかもしれないと思ったが、一匹の姿も見えなかった。雨は上がっていたが、木々からの雨滴が舞い落ちていた。

そのとき、黒沢明監督のオムニバス映画「夢」のなかの一シーンが思い浮かんだ。とある森の中に迷い込んだ主人公が、遠くから聞こえるお囃子に耳を澄まし、それが聞こえる方に目を凝らすと、狐の嫁入りの行列が進行中であった。お囃子が途絶えた一瞬、狐の花嫁がこちらを振り向い

たのが印象的だった。

〈狐の嫁入り〉は、一般的には〈お天気雨〉と呼ばれ、日が照っているのに、雨が降っている現象だが、この日の私たちの周りでは、ちょうとその逆のことが起こっていた。雨が残っているのに、すぐ先まで、日が差し込んできていたのである。〈お天気雨〉とは逆の現象ということなら、〈雨お天気〉と言うべきか、いや、雨とお天気が混ざっていれば、それはどちらも〈お天気雨〉と言うのだろうか。

翌日、宿舎を引き払う日、フロントにはチェックインしたときのスタッフがいたので、もう一度、鹿に会ったことを告げると、怪訝な面持ちで、「変わったことはありませんでしたか？」と聞かれた。子鹿に案内されるようにして〈雨お天気〉に遭遇したことを話すと、「おかしいですね。ホテルに入って来る以外の道は、お客さんが迷うといけないので車は入れないようにしてあるはずですが・・・それに、人声ですか？ゴルフ場は尾根を越えた先ですし、ハイキングコースになっているわけでもないので、人は通らないでしょう・・・夕方のその時間に子どもたちが通ることはないですね、そもそも学校はずっと下の方ですし・・・クマザサがずっと揺れていたですって？・・・ああ、それはやっぱり、〈鹿の婿入り〉の行列だったんじゃないですか？」と言うのだった。

参考・引用文献

Cupid and Psyche © 1977 Errol Le Cain
吉田新一「ル・カイン ― メルヘン絵本にイラストレーターとしての特徴を探る(「イメージの魔術師　エロール・ル・カイン」ほるぷ出版社)二〇〇九年
エロール・ル・カイン「いばら姫(新版)」矢川澄子(訳)ほるぷ出版社　二〇一五年
エロール・ル・カイン「キューピッドとプシケー」　柴哲也（訳）ほるぷ出版社　一九九〇年
いぬいとみこ「木かげの家の小人たち」　福音館書店一九六七年
いぬいとみこ「くらやみの谷の小人たち」福音館書店一九七二年